
春から秋に

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春から秋に

【Nコード】

N0852BA

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

春になりお爺さんとお婆さんは田植えをはじめた。それから夏になり秋になり様々なことをしていき遂に。農業を書かせてもらいました。

第一章

春から秋に

雪がようやくなくなりだった。そこにあったのは。

まだ水の張っていない田だった。それを見てだ。

お爺さんとお婆さんはこれからという顔でお互いに言い合った。

「それじゃあな」

「今年もですね」

「ああ、はじめるか」

「そうしましょうか」

こうだ。二人で言ってであつた。

この日からだった。すぐにだ。

田に水を入れた。まずはそこからだった。

そうしてそこにだ。今度は。

「婆さん、田植えのあれな」

「あの車ですね」

「調子はどうだ？」

お爺さんは田植え用の車のことをお婆さんに尋ねた。

「何か去年は調子が悪かったが大丈夫かい？」

「ああ、あれですね」

「そう、あれな。どうだろうな」

「ちよつと修理に出しておきましたよ」

お婆さんはお爺さんにそうしたと話す。背は少し曲がっているが声はしゃんとしている。お爺さんは白髪でも動きはきびきびとしている。

そのお爺さんにだ。お婆さんは言つのである。

「ですから」

「じゃあもう大丈夫かい」

「そう思いますよ」

「よし、わかった」

ここまで聞いてであつた。お爺さんは。家の納屋からその田植えの車、それに苗をビニールハウスから出してだつた。

まずは田の苗を車に備え付けてだ。家から田んぼまでだ。車で移動してそのうえで。水田の中を進んでだ。

苗を次々に植えていく。車を使っているので速い。

お爺さんのその仕事を見ながら。お婆さんが言ってきた。「車で行けないところはですね」

「ああ、婆さん頼むよ」

お婆さんにだ。植えてくれというのだ。

「いつも通りな」

「はい、わかりました」

それでいいとだ。おばあさんも言葉を返す。

「それじゃあそうさせてもらいますね」

「頼んだよ」

「ええ。また今年も」

どうかとだ。お婆さんは話す。

「はじまりましたね」

「ああ、はじまったよ」

お爺さんは苗を植えながら明るい声で応える。

「田んぼがな」

「毎年。こうしていつて」

「お米が食えるからな」

「そうですね。後は」

米だけではなかつた。他にもだつた。

「胡瓜に大根に」

「そしてトマトに」

「西瓜もありますよ」

野菜もだ。あるというのだ。

「あとあぜ豆も植えて」

「それもあるしな」

大豆のことだ。田のあぜ道に植えるからあぜ豆というのだ。

「色々とな。今年もな」

「忙しいですよ」

こう笑顔で言い合いだ。そのうえで。

二人は田を植え畑を耕した。その畑に。

種を撒いていく。そして肥料も用意してだ。

野菜も作っていくのだった。二人はかなり忙しかった。

その農作業をしている二人にだ。近所の中年の農家の人だった。

笑顔でだ。こう声をかけてきた。

第二章

「今年もやってるね」

「ああ、やってるよ」

「頑張ってますよ」

今は畑にいながらだ。その人の言葉に応える二人だった。

「春になれば本当にな」

「忙しくなりますよ」

「ははは、お互いにな」

そうだとだ。その人も応える。

「けれどこれでな」

「今年も飯が食える」

「お米が」

「だよな。わし等が頑張らんな」

「じゃああんたは苺をな」

「そっちを頑張って下さいね」

「気張るよ」

その人は笑顔でこうも言った。

「明るく楽しくな」

「そうそう、明るく楽しく」

「今年もやらないと」

「わしもそろそろ田に植えるか」

この人もだ。田を植えるというのだ。

「水は入れたしな」

「何だ、まだか？」

「まだ植えてなかったんですか」

「いや、植えるつもりだったけれどさ」

それでもだというのだ。

「色々あつてなあ」

「花の用意かい」

「そうそう、そっちがね」

「花の栽培も大変なんだな」

「結構以上に大変だよ」

中年の彼は笑いながら話す。

「種を撒くのも。それでそれからもな」

「虫かい」

「それが一番辛いよ」

笑いながらだ。お爺さんに話すのである。

「もう幾らでも出て来るからな」

「そうだよな。花には虫がよくつくからな」

「可愛い女の子と同じだよ」

お爺さんにこんなことも話した。

「可愛い女の子には悪い虫がつきやすいだろ」

「ははは、そういえばそうだよな」

お爺さんも車を動かしながら笑って話す。

「婆さんにはわしがついたしな」

「嫌ですよ、お爺さん」

お婆さんはお爺さんの今の言葉には顔を崩して笑った。

「私が花だったなんて」

「いやいや、そうだったよ」

「それでお爺さんはですか」

「ああ、悪い虫だった」

自分でだ。こう言うお爺さんだった。

「そうして婆さんを不幸にしたんだからな。悪い虫だよ」

「またそんなことを言って」

「花に来るのは悪い虫だけじゃないさ」

花を栽培しているその人はこのこともだ。お爺さんとお婆さんに話した。

「まずは汚い言葉から言うつと」

「汚い言葉から」

「それからだとですか」

「糞には糞蠅がたかつて」

確かに汚い言葉ではある。だがその通りだ。

「花には蝶が集るんだよ」

「花には蝶ですか」

「そう。お婆さんは花だから」

それではだ。お爺さんかというとだった。

「まあそういうことでね」

「ははは、わしが蝶か」

お爺さんはその例えを聞いてさらに笑った。そのうえでの言葉だった。

「また言うねえ」

「いやいや、お爺さんは実際にとてもいい人だから」

「だといいのじゃがのう」

「まあとにかくな」

花を栽培している人はここでまた言う。

第三章

「御互い頑張ろうな」

「ああ、わし等もあんなもな」

「頑張りましたよ」

こう声をかけ合いだ。彼等は今年も農業に励むのだった。春は苗を植え種を撒きた。そうしたはじめのことをした。それをしていくうちにだった。

次第に暑くなりだ。梅雨が来た。

雨が降ると外での仕事はしにくくなる。二人は家の中でだ。農具の手入れや農業に使う簡単なものを作りながらだ。外を見て話すのだった。

「今年はよく降るかな」

「天気予報ではそうですね」

お婆さんがお爺さんに答える。今は二人で鎌を磨いている。

「雨の量は多いですよ」

「そうか。それは何よりだよ」

「それにですね」

お婆さんはここでさらにというのだった。

「今年は暑くなるそうですね」

「そうか。暑くなるんだな」

「あまり暑くなるとお米が悪くなりますけれど」

「それでも冷害よりはずっとましだよ」

それがだ。農家にとっては最大の敵なのは何時でも変わらない。

「それはないんだな」

「天気予報ではそうですね」

「じゃあ信じさせてもらうか」

そのだ。天気予報をだというのだ。

「ここは」

「そうですね。後は」

「田んぼにザリガニは出てるか？」

「いえ、出てないですよ」

それはだ。安心していいというのだ。

「鴨も働いてくれてますし」

「鴨もいいなあ」

「最初は大丈夫かって思いましたけれど」

所謂合鴨農法もやっているのだ。鴨に害虫やそうしたものを食べてもらってそれで農薬を使わないようにしているのだ。そして鴨は後で食べるのだ。

「いいものですね」

「全くだよ。秋になれば」

秋のことをだ。お爺さんは今から楽しみにしている顔で話すのだ。
った。

「鴨も食えるし」

「農薬よりずっといいですよね」

「そうだよな。それにしても」

外は雨なので雨音が聞こえてくる。そしてだ。

さらにだ。蛙の鳴き声もだった。聞こえてきていた。

それも聞いてだ。お爺さんは目を細めさせてお婆さんに話す。

「雨が降ってそれで蛙の声を聞くと」

「梅雨だっと思っていますよね」

「蛙がいないと梅雨じゃないよ」

「それとですね」

「ああ、梅酒な」

お爺さんの目がさらに細くなる。

「梅も漬けて梅酒も造って」

「明日それしますか？」

「明日も雨か？」

「雨になれば」

そうなればだというのだ。明日も雨ならばだ。

「そうしましょう」

「そうだな。雨ならな」

「はい、それじゃあ」

「晴れなら外だ」

そう言っただ。今磨いている鎌を見てだ。お爺さんはお婆さんに話した。

「それで草を刈るか」

「新しい草刈り機も用意していますよ」

「おお、早いな」

「お爺さん草刈り好きですから」

「鎌を使うのは昔から得意だしな」

そしてだ。草刈り機でもある。

「ついつい自然にやっってしまうんだよ」

「では。明日晴れなら」

「ああ、草刈りだ」

今からそれをすることを楽しみにしているお爺さんだった。それはまるで子供が遠足に行く様な、そうした明るいものだった。

第四章

次の日は晴れだった。それでだ。

お爺さんは鎌に草刈り機で武装してだ。笑顔で草を刈った。お婆さんもそれを手伝いだ。次の雨の日に梅を漬けて梅酒を造ることを考えていた。

梅雨はそうした感じだった。そして夏になると。

晩御飯を食べながらテレビを観てだ。お爺さんは顔を顰めさせてお婆さんに言った。

「おいおい、こっちに来るか」

「来ますね、これは」

「しかも大きいな」

テレビの天気予報を観ながらの話だ。二人共茶碗と箸を持って白い御飯を食べながらだ。そのうえで話をするのだった。

「高気圧は何をしているんだ」

「今日日本にいないですから」

「だから来るんだな」

「はい、台風が」

まさにだ。その台風がだ。日本に来ようとしていたのだ。当然ながら農業には不倶戴天の敵である。

「どうやら」

「来なくていいのにな」

お爺さんはうんざりした顔で本音を口にした。

「あんなのは」

「それ毎年言ってますんか？」

「言つさ。苗が不安だよ」

「それにビニールハウスも」

「あれも全部外してな」

それでビニールハウスを飛ばさないようにするといふのだ。

「そうしないと飛ぶからな」

「あと畑も」

「そうそう。ちゃんとしとかないな」

「何かと大変ですね」

「そうだよ。それじゃあな」

「はい。台風が来たら」

その時はどうするかをだ。二人で話して備えるのだった。

そしてだった。遂にだった。台風は呼んでもいないのに来た。

「直撃だそうですね」

「全く。本当に来るなんてな」

お爺さんはお婆さんの話に忌々しげに応える。そうしながらだ。

それぞれカップを来てだ。雨と風が強まっていく中にだ。

外に出てだ。すぐにだった。

ビニールハウスのビニールを全て外したのだった。二人で。

それを急いでしてだ。その中でだ。

お爺さんはお婆さんにだ。こう尋ねた。

「入れるものは全部納屋に入れたよな」

「はい、もう」

「そうか。それならいいんだ」

それを聞いてだ。お爺さんは言った。雨と風の中なので声はあえて大きくさせている。

そしてそのうえでだ。彼は言うのだった。

「じゃあ家に戻るか」

「ええ。けれど」

「けれど。やっぱり忘れものあったのか」

「それはないんですけれど」

「じゃあ何がどうしたんだ？」

「屋根大丈夫でしょうか」

それを言うお婆さんだった。

「この嵐だと」

「ああ、屋根か」

お爺さんも言われてだ。そのことにはつとした。
それでだ。家の上を見た。その屋根をだ。

それで考える顔になってからだ。お婆さんに言った。

「今から補強するか？」

「屋根にあがつてですか」

「ああ。さもないと瓦が吹き飛んだりするだろ」

それを心配しての言葉だった。瓦が飛べばそれだけでかなり危ない。しかもそこから水が入ってしまう危険もある。だから言うのだ。

「だから今のうちに」

「けど」

そのお爺さんにだ。お婆さんは心配する顔で言った。

「危ないですよ」

「この嵐じゃ危ないか？」

「危ないですよ。ですから」

だからだというお婆さんだった。

第五章

「もう家に入りましょう」

「ここで屋根にあがったら駄目か」

「飛ぶのはお爺さんになりますよ」

風は次第に強くなってきた。まさに台風だ。

「ですからもう」

「はしごをかけるにしても」

「そのはしごにしろ」

この嵐ならというのだ。

「飛びますから」

「じゃあどうしようもないか」

「はい、やっぱり危ないです」

そうだとお爺さんに話すのである。

「ですから」

「わかった」

仕方ないといった顔でだ。お爺さんも遂に頷いた。

そしてそのうえでだ。お婆さんに対して言うのだった。

「じゃあ家に入ろう」

「はい、屋根は確かに不安ですけど」

「わしに何かあったらどうしようもないな」

「そうです。瓦も屋根もその時はその時で」

「瓦が飛んでそれが人に当たったら」

「こんな時に外に出てる人の方が悪いんですよ」

それこそ災害救助の人以外にはだ。お婆さんの言うことは一理だった。

そしてお爺さんはその一理を受けてだ。決めたのだった。

こうして二人は家に入りだ。台風を避けるのだった。

それからだった。台風が過ぎ去って。

お爺さんもお婆さんも外に出てだ。まずは屋根を見た。すると
「何とかな」

「はい、大丈夫でしたね」

二人は屋根を見てだ。まずはほっとしたのだった。

「本当にどうなるかって思ってた心配だったけれど」

「何ともありませんでしたね」

「いや、よかった」

お爺さんは心からこの言葉を述べた。

「本当にな」

「そうですね。それに」

「瓦もな」

「ええ。瓦も一枚も飛んでいませんね」

家の青瓦も一枚もだった。飛んでいなかった。それも大丈夫だったのだ。

そこまで見てだった。二人は安堵したうえで。

お爺さんの方からだ。言うのだった。

「じゃあ。早速な」

「はい。ビニールハウスですね」

「それを貼ろう」

台風で剥がしていたそれをだというのだ。もう一度張るというのだ。

そのことをだ。お爺さんから言ってだった。

お婆さんもだ。お爺さんのその言葉に笑顔で頷いて。そうしてだった。

「わかりました。それじゃあ」

「張るか」

こうした話をしてだった。お爺さんとお婆さんの二人でだった。そのビニールハウスを張ったのだった。二人の中では台風は終わったのだった。

小さく青かった苗もだ。台風が過ぎてから見ると。

青々と成長していたところに次第に米が実りだしていた。

その米を見てだ。お爺さんは目を細めさせてお婆さんに話した。

「いよいよだよな」

「そうですね。今年もですね」

お婆さんもだ。その細めさせた目でお爺さんに応えて言う。

「お米が」

「ああ。けれどな」

「雀ですね」

「あれが一番厄介だからな」

こうだ。青から金色になろうとしている米を見て言うお爺さんだ
った。

「かかしもあるけれどな」

「気休めですからね」

見ればもうかかしがある。しかしそれでも来るのが雀だ。雀とて
馬鹿ではない。かかしがあろうとも見破って米にたかるのである。

それがわかつているからだ。お爺さんは。

「今年もな」

「網をですね」

「ああ、張つてな」

「それと目玉も置いて」

ビニールの黄色い大きな目玉だ。雀だけでなく鳥も驚かせてそれ
で寄せ付けないのだ。鳥への備えも厳重にしているのだ。

第六章

「そうしていくか」

「もつと早くしておくべきでしたね」

「今年は遅れたな」

「色々ありましたから」

「そうだな。だがとにかくな」

網だ。それを張るのだった。

そうして網を張ってからだ。それでだった。

米を食わないようにした。すると。

雀達はまだ田んぼの周りに群がっているがそれでもだ。米は食わなくなつた。もつと言えはお爺さん達に食えないようにされたのだ。

こうして少し待った。そして。

夏が進みだ。それでだった。

米はだ。完全に金色になつてた。実りを大きくさせていた。

それを見てだ。また言うお爺さんだった。

「後はな」

「ええ、刈り入れですね」

「いよいよだな」

お爺さんは笑顔でお婆さんに言った。

「本当にいよいよだよ」

「ええ。それに」

しかもだった。お婆さんは。

ここで空を見た。田の上をだ。そこには。

蜻蛉達がいた。これでもかという位多く飛んでいる。その蜻蛉達を見てだった。

お婆さんはこんなことを言った。

「蜻蛉が」

「多くなつたな」

「前から思ってたんですけど」

その蜻蛉達をさらに見てだった。

「蜻蛉がいるからですな」

「蚊がいないんだな」

「そうですね」

こうお爺さんに言うのだった。蜻蛉達が蚊を食べているのだ。

「そう思うと蜻蛉も有り難いですね」

「それにな」

「それに？」

「雀もな」

そのだ。米を食う厄介者もどうかというのだ。

「雀も虫を食ってくれるからな」

「そうですね。雀も」

「そう思うと雀も有り難いよ」

「全くですね。厄介者ですけれど」

「そんなこともしてくれるからな」

この辺りは中々複雑だった。雀は害を為すだけではないのだ。しかもだ。

お爺さんは自分の足下、長靴のそこをちゅんちゅんと跳ねる様にして動いているその雀を見てだ。今度はこんなことを言った。

「この連中に毎朝だからな」

「そうそう。起こされて」

「鶏と一緒に鳴くからな」

雀の朝は早い。朝日と共に起きて鳴くのだ。本当に鶏と一緒にだ。

その雀達を見てだった。お爺さんは言うのである。

「可愛い奴等だよな」

「ですよ。何かいつも」

「いつも？」

「秋になると」

そのだ。秋になるとああと言うお婆さんだった。

「気持ちが明るくなりますね」

「いよいよ刈ってな」

「はい、収穫ですから」

「もうすぐだ」

お爺さんも満面の笑みで言う。

「お米に野菜にな」

「はい。全部ですね」

「楽しみにしておくか」

こんなことをだ。二人で笑顔で話すのだった。

秋のはじめから進んでそうして。その時になりだ。

お爺さんはトラクターで米を一気に刈り入れる。お婆さんはトラクターが届かない細かいところを刈る。ついでに野菜も収穫して草も刈ってだ。何もかもがだ。綺麗になくなったのだった。

その祝いにだ。二人は家で。

第七章

鴨鍋を囲んでだ。笑顔で話をしていた。

「今年もな」

「はい、よく採れましたね」

「しかも今年は豊作だったな」

「そうでしょね。豊作でした」

二人でこのことも祝うのだった。祝いながらだ。

鴨鍋を食べる。その味は。

「やっぱり美味しいな」

「やっぱりまずはこれですよ」

「ああ、鴨鍋だ」

「最近はじめたこれですけど」

「今はこれがないとな」

「終わったって感じがしませんよね」

そのだ。合鴨農法の鴨である。鍋以外に燻製にもしている。

「最後の最後で食べて」

「ああ、今年も終わったってな」

「なりますよね」

「それで婆さん」

お爺さんは鍋の中の葱、自分達の畑のそれをつまみながらだ。お婆さんに尋ねた。

「一ついいか？」

「何ですか？」

「来年だけれどな」

もうだ。今からその話だった。

「来年はもう一つ野菜を作るか？」

「何をですか？」

「そうだな。サツマイモなんてどうだろうな」

それをだ。作ろうかというのだ。

「あれはな」

「そうですね。いいですよ」

「ああ。丁度畑の余裕もあるしな」

「それじゃあ今度はそれですね」

「サツマイモは土地が悪くても採れて、しかもだった。それに加えて、

甘くて美味いからな」

「ですよ。おやつにもなりますし」

「じゃあ作るか」

お爺さんはすぐに決めた。

「来年はサツマイモもだ」

「精が出ますね」

「ははは、働ける限りはどんどん働くさ」

お爺さんはビールを飲みながらお婆さんに話す。

「そろそろあいつも戻って来るしな」

「和泉も」

「全く。東京の大学に行くなんてな」

「手が足りないですよ」

「仕方のない奴だ」

こうだ。自分達の娘について話すのだった。

「全くな」

「そうですね。けれど」

「ああ、それでもな」

「農学部に行ってくれたから」

農家で農学部に進んでくれた。両親にとってはこのことも嬉しいことだった。実は大学に行ったことも嬉しいことだったのである。

「よかったよかった」

「本当に」

「後はあいつが結婚して」

「お嬢さんが来てくれたら」

「万々歳だ」

「誰かいますかね、お嬢さん」

「見合いさせるか？」

お爺さんは笑いながらこんなことを話した。

「一度な。そうさせるか」

「お見合いですか」

「ほら、津田さんのところの孝則君」

この名前を出す。近所の彼等と同じ農家をしている家の次男坊だ。彼は地元の大学に通っているのだ。その彼も同じくだった。

「農学部だしな」

「じゃあ丁度いいですね」

「ああ、農家の嬢に丁度いい」

「それに農業やりたいって言ってますし」

「和泉とも仲がいいしな」

「それじゃあ話を進めるか」

「そうしましょうか。刈り入れも終わりましたし」

時間ができたならだ。それを使うというのだ。

その話をしてだった。お爺さんとお婆さんは。

実りの秋の後でだ。別の実りを実現させようとしていた。それだ。

まただ。お爺さんが言った。

「さて。今年の冬は今年の冬で」

「忙しくなりますね」

「ああ、楽しみだよ」

秋は終わっても春までにだ。別の秋を迎えようとしている二人だった。もう一つの実りの秋を。その為にまた働こうというのだった。

2
0
1
1
·
7
·
6

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0852ba/>

春から秋に

2012年1月1日23時48分発行